

令和2年度 学校経営計画書

石川県立金沢泉丘高等学校（全日制課程）

学校長 宮本 雅春

1 教育目標

心身一如の発達につとめて

真理を求め、勉学を第一義とすること

情操を豊かにし、自らの品位を高め、他者の人格を重んずること

正義を愛し、誠実にして、社会から信頼されること

2 中・長期的目標

(1) 学校の現状

- ① 本校は、創設以来「心身一如」を校是とし、調和のとれた人材育成に取り組んでいる。「確かな学力」を身につけさせるとともに、次世代を担う心身共に健全で品位と良識あふれるリーダーの育成をめざし、保護者や県民から信頼される学校づくりを進めている。
- ② 大学進学に関して、県内有数の進学校としての実績を収めている。世界を視野に高い志を掲げて学習させるとともに、第一志望を実現させることをめざしている。
- ③ 平成15年度からSSH研究開発1期目の指定を受け本年、4期目が終了する。5期申請に向け、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成プログラムの完成を目指している。
- ④ 平成27年度からの5年間のSGHの指定が終了し、グローバルな社会課題に関し、多面的に考え、多角的に行動する力を備えた、国際舞台で活躍する人材の育成のための本校独自の探究活動プログラムが形になり、本校普通コースにもその指導のノウハウは波及している。そして新しい金沢泉丘SGHプログラムの開発に取り組んでいる。
- ⑤ 平成24年度に「いしかわニュースーパーハイスクール」の指定を受け、人文科学、自然科学の両分野における幅広い教養を身につけ総合力を備えた、国際性に優れた次世代を担うリーダーの育成をめざしている。本県ニュースーパーハイスクールの牽引役の使命を担っている。

(2) 生徒に関する中・長期的目標

- ① 「確かな学力」の育成
進学実績の向上をめざし、確かな知識に基づいた深い学びにつながる質の高い教科指導を、ICTの活用や主体的・協働的な学習方法を取り入れながら、組織的に展開する。
- ② 豊かな心の育成
「心身一如」の具現化に向け、部活動・学校行事・社会奉仕活動等の教育環境・設備を整え、次世代を担うリーダーに必要な人格の陶冶をめざす。

(3) 教職員・学校組織等の望ましい在り方

- ① 指導力の向上と組織の活性化
県民目線で教育公務員としての規範意識をしっかりとち、法令を遵守する。効果的な教育活動を展開するために、研究授業や職員研修会をとおして教職員の指導力を高める。また、組織運営の合理化・効率化を推し進めることにより、教職員がワーク・ライフ・バランスを維持し、活力と創造力を十分に発揮することのできる職場環境を形成する。
- ② 開かれた学校づくり
本校の方針や特色ある取り組みを、積極的に県民に伝え、広く協力・支援が得られる学校とする。また、PTAや地域社会とも連携することによって、本校の教育活動が有機的に展開することをめざす。

3 今年度の重点目標

創立127年目を迎える歴史と伝統を踏まえ、建学精神に基づいた教育活動の実践に努める。

(1) 「勉学を第一義とする」をふまえ、質の高い学力を育成する。

・ 知的好奇心旺盛な生徒に質の高い授業を提供する。生徒の質問力を高めるなど指導法の研究・改善に努める。新しい大学入試で求められる力及び大学卒業後もイメージし、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。

(2) 探究活動プログラムの進化・発展に努める。

・ これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させるとともに、その指導法を本県高等学校に波及させる。また、SSH5期申請に向けSSH・SGHプログラムを融合させるなど新しい探究活動プログラムを研究する。

(3) 「品位を高め、他者の人格を重んずること」をふまえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。

・ 挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。

(4) 「正義を愛し、社会から信頼されること」をふまえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。

・ 授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。

(5) 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。

・ 効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。

令和2年度 自己評価計画書

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
<p>「勉学を第一義とする」をふまえ、質の高い学力を育成する。</p> <p>知的好奇心旺盛な生徒に質の高い授業を提供する。生徒の質問力を高めるなど指導法の研究・改善に努める。新しい大学入試で求められる力及び大学卒業後もイメージし、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。</p>	①	教務課	<p>昨年度、本校で勤務年数の長い教員の知識や経験を生かすとともに「授業教材の共有化」に取り組み、効率的・効果的な授業を目指した。その結果、昨年12月の生徒による授業評価で、「授業が充実しているか」の全体平均値が3.62と高い値であった（前年比0.07上昇）</p> <p>今年度、新たに「生徒の質問力の向上」を目標に掲げた。昨年度、生徒にしてほしい質問を段階的に整理した質問ルーブリックを、各教員に考えてもらった。これを踏まえ各教員が、生徒が授業内容を掘り下げる質問ができるよう、授業を工夫することで、生徒の論理的思考力、判断力、表現力を高めたい。</p>	【満足度指標】 生徒の授業に対する満足度が高まる。	<p>「授業が充実しているか」の質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて、加えた値 α を算出する。</p> <p>①「よくあてはまる」 ②「ややあてはまる」 ③「あまりあてはまらない」 ④「全くあてはまらない」</p> <p>α の値が A 3.60以上 B 3.55以上 C 3.50以上 D 3.50未満</p>	C・Dの場合、授業改善に向けた取り組みの再検討を行う。	生徒による授業評価を実施
	②	進路指導課	<p>東京大学の現役合格者は、引き続き10人以上を目指したい。</p> <p>3年生の難関10大学志望者数は、2月の進路志望調査によると262名で、例年よりやや多い。</p> <p>2年生の進路志望調査の結果は例年とほぼ同じで高い志望を維持している。</p>	【成果指標】 受験集団としての意識が高まり、東京大学・京都大学・国公立大学医学科の合格者が増加する。	<p>東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が、 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満</p>	C・Dの場合、授業や3年間を見通した進路指導について、再検討を行う。	年度の当初に入試反省会・検討会を実施
	③	1学年	<p>臨時休業という厳しい状況からスタートした。オンラインSTにより、生徒が起床時間や就寝時間を回答することで、生徒の生活習慣の確立を促すとともに動画配信や質問に答える仕組みを整え、学習に対する不安を減らしたい。スムーズに学校生活に入ることができるような工夫が必要である。</p>	【満足度指標】 個人面接指導により、生徒の学習姿勢や学力が向上する。	<p>一年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。	生徒によるアンケート調査を実施
	④	2学年	<p>ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、高い進路志望の確立を図る。また、学習時間調査の結果も踏まえ家庭学習の定着を図る。</p>	【満足度指標】 個人面接指導により、生徒の学習姿勢や学力が向上する。	<p>一年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。	生徒によるアンケート調査を実施
	⑤	3学年	<p>授業内容をより充実させるとともに、放課後補習および個人添削等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた指導を展開していく。</p>	【成果指標】 個に応じた指導により、第一志望の大学への進学が実現する。	<p>難関10大学及び国公立大学医学科部医学科の合格者数が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満</p>	C・Dの場合、授業や補習、個人添削等の方法について、再検討を行う。	次年度の当初に入試反省会・検討会を実施

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
2 探究活動の進化・発展に努める。 これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させるとともに、その指導法を本県高等学校に波及させる。また、SSH5期申請に向けSSH・SGHプログラムを融合させるなど新しい探究活動プログラムを研究する	① カリキュラムの中の科学的な課題研究活動を充実させることで、生徒の探究力・思考力・行動力の向上を図る。また、それぞれの探究活動において生徒が自らの変容を確認できるファイルの作成に取り組む。さらに文理融合の課題研究への取組も実践する。	SSH推進室	SSH事業は4期5年目となり、理数科の課題研究活動プログラムはある程度確立され、普通科普通コース理型の課題研究活動も授業改善されたことで、生徒の探究心の向上がみられるようになった。今後はより多面的な見方の育成のため、文理融合の課題研究にも取り組みたい。探究活動の評価については、ルーブリックを使用しているが、点数評価に偏っている部分がある。点数評価も大事にしつつ、生徒自身が自らの変容を振り返ることができる評価になるよう工夫していく必要がある。	【満足度指標】 SSHの取組で探究力・思考力・行動力が身につく。	『AI 課題研究Ⅰ』(1年)『AI 課題研究Ⅱ』『SS 課題研究Ⅰ』(2年)『AI 課題研究Ⅲ』『SS 課題研究Ⅱ』(3年)は、「探究力、思考力、行動力を高める機会になっている」の項目で、「よくあてはまる」「あてはまる」と回答するSSH主対象生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、計画の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
	② 課題研究を中心とした探究型学習のプログラムの改善を図り、より「文理融合」を強化したカリキュラム開発を行う。また、問いを立てる力の育成など他にも新たな目標を設定して、その達成のために事業を展開する。	SGH推進室	SGHの指定が終了し、5年間の研究開発を通して課題研究を軸とした探究型学習のカリキュラムも確立した。今年度は、新しく設定した目標に基づき、これまでの事業の継承だけでなく、より高度なものにプログラムを発展させていくことが求められる。特に、SSH推進室との連携を強化することで、学校全体としての探究のあり方を議論しながら、構築していく必要がある。	【満足度指標】 SGHの取り組みで思考力や表現力、他人と協働する態度が育成できる。	『SG 探究基礎』(1年)や『SG 探究』『NS 探究α』(2年)『SG 探究活用』『NS 探究β』(3年)は、「自らの考えを相手を意識し客観的な根拠に基づき論理的に表現する能力を高める機会となっている」という項目で、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」とする生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、内容の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」をふまえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。 挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。	① 各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高め心豊かで、グローバル人材となる資質を育成する。	総務課	昨年度10月に「生き方講演会」(探検家・人類学者・外科医 関野吉晴氏)、2月に1年生対象に「人権教育・国際理解講演会」(増山仁氏)などを実施した。講演会後の生徒アンケートでは、87.5%の生徒が「満足している」と回答しており、ここ5年間の平均は、87%を超えている。	【満足度指標】 講演会を積極的に評価している生徒の割合が大きい。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、次年度に向け、講師の選定等を工夫する。	生徒へのアンケート調査を実施
	② 基本的生活習慣の確立を図ることを目的に、挨拶の指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・授業の開始、終了の挨拶 ・職員室等の入室マナー	生徒指導課	登校時や校内(廊下等)では、自主的に挨拶をする生徒が増えてきている。しかし、来校者や地域の方々に対する挨拶については、まだ十分ではなく、他者からみて好感がもてるとは言い難い。	【成果指標】 しっかりと挨拶が出来る生徒が多くなる。	「場面に応じた元気で明るくさわやかな挨拶ができています」と答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	③ 「いじめを絶対に許さない」学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	生徒指導課	ふざけているつもりでのからかいや、SNSでの不適切な表現などでの問題等がある。	【成果指標】 互いに認め合い助け合う仲間づくりができる生徒が多くなる。	「他人の人格を重んじ、尊重する態度で接するとともに助け合う仲間づくりができる」と答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	④ 部活動等の活性化及び競技力の向上を図るとともに部活動と勉学の両立(文武両道・文武不岐)をめざす。	生徒指導課	部活動加入率は高く、意欲的に活動し、有意義であると答えている生徒が多い。運動部は総体総合成績において県立高校1位である。文化部でも多くの部が上位大会に出場し、優秀な成績を収めている。	【成果指標】 生徒主体の活発な活動により上位大会に進出する部が増える。	県予選を突破し7ブロック大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	C・Dの場合、次年度へ向け、指導方法を工夫する。	県総体・総文等の結果報告による
	⑤ 環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。 ・ゴミの分別・節水・節電 ・学校周辺のゴミ拾い	保健環境課	探究的な授業等において学んだ、地球環境に調和した持続可能なライフスタイルについて、知識としてだけでなく、自分自身の生活の中で実践することが課題である。	【満足度指標】 環境保全を意識して生活し、実践している。	校内の環境保全活動に努めていると答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、取り組みの見直し・改善を検討する。	生徒へのアンケート調査を実施

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
	⑥ 読書と学習環境の整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書の精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などに努め、貸し出し冊数や入館者数の増加を図る。	図書課	情報メディアの普及による読書離れの影響は本校生徒にも見られるが、普段の読書啓発・読書推進活動はもとより、授業や教科の学習と運動した読書や図書館利用の一層の充実を図ることが今後の課題である。	【成果指標】 図書館の利便性が高まり、図書の貸し出し数が増えている。	1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 4,500冊以上 B 4,000冊以上 C 3,500冊以上 D 3,500冊未満	C・Dの場合、取り組みの見直しと改善を検討する。	月毎の貸し出し数調査を実施
	⑦ 悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるように支援する。	教育相談室	進路に対する不安や学習面でのつまずき、人間関係の悩みなどによって、学校生活に対する意欲を失いかけたり、情緒が不安定になったりする生徒が見受けられる。	【満足度指標】 気軽に相談室を利用することで、精神の安定が保たれるようにする。	相談室を利用した生徒による学校評価アンケートの「気軽に相談でき利用しやすい」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、学年、関係各課室と連携して対策を検討する。	来室者へのアンケート調査を実施
4 「正義を愛し、社会から信頼されること」をふまえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。	① 保護者懇談会、PTA活動、いしかわ教育ウィークなどを通して積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強くし、開かれた学校づくりをめざす。	総務課	昨年、「PTA総会」は787名（家族含むと907名）、「生き方講演会」に35名の保護者、いしかわ教育ウィークは211名の来校者があり、合計1,033名であった。（一昨年の合計1,023名） 保護者アンケートの「学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいる」については、94%が評価しており、ここ5年間の平均は、94.8%である。	【成果指標】 本校の教育に対する保護者等の関心が高まり、学校公開への参加者が増える。	今年度の「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク」・「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校数が合わせて、 A 1200人以上 B 1000人以上 C 800人以上 D 800人未満	C・Dの場合、PTAと協力して広報活動に努める。	PTA 総会 (5/12) いしかわ教育ウィーク (11/1~7)
・保護者懇談会、授業公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。	② 理科科1、2年生、SSH委員、SSH部及び科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスグランプリ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実したものとすることで、科学教育の面から地域に貢献する。	SSH推進室	毎年理科科1年生が、「創立記念祭」に来校した小学生等に対して「理科教室」を開催し、参加者から好評を得ている。特別講義を一般にも公開し、地域の方や中学生が参加できるようにしている。また、金沢子ども科学財団と「金沢泉丘サイエンスグランプリ」を共催し、高校生と小中学生が協働活動することで、科学教育の面から地域に貢献している。金沢子ども科学財団とは双方向の連携ができるよう体制を確立させたい。	【満足度指標】 SSHの取組を地域に還元できる。	「理科教室や金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラムに参加して、どう思いますか」という質問に対して「大変良かった」と回答するプログラムの参加者の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、次年度に向け、取り組みの改善を検討する。	参加者へのアンケート調査を実施
	③ 「学年だより」、「進路だより」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。	1学年 2学年 3学年	定期的な「学年だより」「進路だより」の他に、伝えたい機会を逃さず「学年通信」を生徒向けに発行している。1年次に「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者は72.8%であった。2年次に「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が75.4%であった。	【満足度指標】 学校からのたより・通信等をとおして、保護者に学校の様子がよくわかる。	「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、次年度に向け、内容の改善を検討する。	保護者へのアンケート調査を実施
5 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。 ・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。	① 業務の見直し、密度の濃い会議運営など組織運営の効率化、職場環境の改善、教職員の意識改革、時間管理の工夫等を進めることにより、教職員のワーク・ライフ・バランスをとり、教育活動の質の向上を図る。	管理職	進学校としての進路指導・学習指導、文武両道を目指す部活動指導、SSH・SGHプログラムを中心とした新しい時代の要請に応える教育活動の展開、創立記念祭をはじめとした生徒会活動への指導など、教職員に求められる業務が多様で、量的にも負担が大きい。業務改善、職員の意識改革をとおし、効率的で密度の濃い、そして質の高い教育を展開していく必要がある。	【満足度指標】 気力、知力、体力の面から、一層効果的な教育活動を展開できていると感じている教員の割合が高い。	ワーク・ライフ・バランスをとることにより、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教員の割合が、 A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満	C・Dの場合、次年度に向け、内容の改善を検討する。	教員へのアンケート調査を実施